



# 未来の図書館 研究所 NEWS LETTER

No.16  
2024.8.5



## Contents

- 2024 年度 主催イベントのご案内
- 研究所 TOPICS
- お悔やみ 内野 安彦氏
- 地域の人々をつなぎ、豊かな知の世界につながる入り口をめざす大桑村図書館／平中 和司
- AI 活用で図書館は何を目指すか／戸田 あきら (Library Compass 第 12 回)



### 2024 年度 未来の図書館 研究所 主催イベントのご案内

#### ■ オープン・レクチャー「公共図書館の目指す価値と蔵書構成の実際」参加申込み受付中

**講演者** 大場 博幸 (おおば・ひろゆき) 氏 (日本大学文理学部教授)

**日時** 2024 年 9 月 19 日 (木) 14:00~16:00 **開催方法** 会場とオンライン (Zoom)

**会場** 株式会社ヴィアックス 本郷研修センター (東京都文京区本郷 4-9-25 真成館ビル 2 階)

**定員** 会場 20 名・オンライン 50 名 **参加費** 無料 **主催** 未来の図書館研究所 **協賛** 樹村房

**詳細・お申込み** 右記 QR コードまたは申込みフォーム<[https://www.miraitosyokan.jp/future\\_lib/lecture/202409/](https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/lecture/202409/)>から

大場氏の近著を  
参加者限定割引  
価格 4,000 円 (税  
込) で販売します



#### ■ 第 8 回ワークショップ「図書館員の未来準備」(5日間7科目) 10 月~11 月開催 参加申込み受付中

これからの図書館を考え、未来に備える図書館員の皆さまの学びの機会として、毎年開催しています。今回も会場とオンライン (Zoom) の両方で開催し、参加方法は科目ごとに選択できます (一部、会場開催のみの科目あり)。

**受講単位: 受講料 (すべて税込)**

**領域: 講師 (日程順)**

- ・領域① 図書館の情報システム: 9,000 円
- ・領域② 図書館の役割 1 「図書館とコミュニティ」: 6,500 円
- ・領域③ 図書館の役割 2 「図書館と学び」: 6,500 円
- ・全科目: 20,000 円
- ・科目別: 1 科目 3,000 円・2 時間を超える科目は 5,000 円

- ・領域①: 星野 雅英氏, 川嶋 齊氏, 中野 良一氏
  - ・領域②: 豊田 恭子氏, 大串 夏身氏
  - ・領域③: 渡辺 ゆうか氏, 村山 正子氏
- ※ 村山氏の科目はニュースパーク (日本新聞博物館) で開催、会場参加のみ。オンライン参加はできません。

詳細は、下記 QR コード・URL からフライヤーをご確認ください

[https://www.miraitosyokan.jp/future\\_lib/ws/202410/workshop2024.pdf](https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/ws/202410/workshop2024.pdf)



#### ■ 第 9 回シンポジウム「図書館と居場所」11 月 15 日 (金) 開催 近日参加申込み受付開始

今回は「図書館と居場所」をテーマに、人々が安心して、また、落ち着いて時間を過ごすことができ、地域の人々が集い、つながり、活動する場としての図書館を考えます。登壇者には、こども家庭庁『こどもの居場所づくりに関する指針』のとりまとめに参加された青山鉄兵氏 (文教大学人間科学部准教授)、武蔵野プレイス、都城市立図書館などの立ち上げ及び運営に関わられた森田秀之氏 (株式会社マナビノタネ) をお招きします。会場 (出版クラブホール) とオンライン (Zoom) の両方で開催予定です。

## 研究所 TOPICS

#### ■ 書籍『図書館と知識社会 (未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2023)』発売中

2024 年 5 月 30 日に、今号も引き続き書籍として発行しました。樹村房より発売中です。詳細・ご購入は右記 QR コードまたは下記 URL からご覧ください。

▶ [https://www.jusonbo.co.jp/books/304\\_index\\_detail.php](https://www.jusonbo.co.jp/books/304_index_detail.php)



#### ■ 電子出版制作・流通協議会主催「2024 年電流協電子図書館セミナー」に研究理事 磯部が登壇

2024 年 5 月 31 日に日本図書館協会 2 階会議室で開催された「2024 年電流協電子図書館セミナー」に、研究理事の磯部ゆき江が登壇し、長野県関係者からのメッセージとともに「長野県デジとしよ信州の事例紹介」をおこないました。

▶ <https://aebs.or.jp/seminar20240531.html>



#### ■ 日本図書館協会主催「2024 年度中堅職員ステップアップ研修 (1)」の講師を理事長 永田が担当

2024 年 10 月 28 日に、「領域 3: 図書館の理解を深めるための関連トピック」の科目として、「ユネスコ公共図書館宣言の改訂と今後の図書館」をテーマに、理事長の永田治樹が講師を担当します。

▶ <https://www.jla.or.jp/committees/kenshu/tabid/1083/Default.aspx>

#### お悔やみ ◆ 内野 安彦 (うちの・やすひこ) 氏 (元鹿嶋市立図書館長・元塩尻市立図書館長)

2024 年 6 月 10 日ご逝去、享年 67 歳。1979 年に茨城県鹿嶋市役場 (現鹿嶋市役所) に入職し、図書館長などを経て退職。2007 年に長野県塩尻市役所に転じ、図書館長として塩尻市立図書館の開館に尽力されました。退職後は立教大学や常磐大学などで教鞭を執り、FM ラジオで図書館をテーマにした番組のパーソナリティも務められました。

未来の図書館研究所主催第 3 回シンポジウム「図書館とサステナビリティ」(2018 年 10 月開催) では、「図書館をまちのたからものにするには」をテーマにご講演いただき、本紙 No.7 (2022 年 1 月発行) には、「古書店で何ができるのか」をご寄稿いただきました。生前の当研究所へのお力添えに深く感謝し、謹んでお悔やみ申し上げます。

# 地域の人々をつなぎ、豊かな知の世界につながる入り口を めざす大桑村図書館

## 平中 和司(大桑村図書館 館長)

2022年9月、木曾谷の山間に大桑村図書館が開館した。蔵書数は少なくとも豊かな知の世界につながる、身近で大きな広場であることを基本コンセプトに据え、情報アクセスの選択肢を増やすとともに、地域の人々をつなげるさまざまな活動がおこなわれている。ほぼ同時期にスタートし、その活動を支える「デジとしよ信州」もある。平中館長にこの図書館のめざすところと課題についてご寄稿いただいた。

### ◆大桑村図書館の概要

大桑村図書館は2022年9月23日に開館したばかりの、長野県では一番若い図書館である。同年5月に開庁した大桑村役場新庁舎に併設され、図書館部分の総床面積は222㎡、収蔵可能冊数は2万冊という小さな図書館だ。

役場庁舎が複合施設であることから、図書館も、本を楽しめる場所というだけでなく、人や情報と出会うことで、学びや交流を生み出す、出会いの広場となることをめざしてスタートした。

また、大桑村図書館の開館とほぼ同時に長野県では市町村と県による協働電子図書館(愛称:デジとしよ信州)がサービス提供を開始した。規模の小さい図書館であるため、このデジとしよ信州も積極的に案内している。

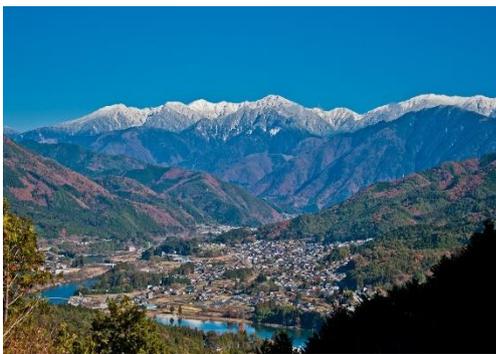
以下、山村の小規模図書館が、豊かな知の世界への入り口としてだけでなく、地域で活動する人々をつなげる場として何をしてきたのかを報告したい。

### ◆大桑村の概況と図書館設置の経緯

大桑村は、長野県南西部にある、人口3200人ほどの小さな村である。

総面積は約230km<sup>2</sup>と広いが、その95.7%を森林が占めており、耕地及び居住面積は限られている。気候は、寒さの厳しい木曾の中では比較的温暖で、降水量が多いことが特徴である。これは木材の育成に適しており、古くから良材の産地として林業が盛んだった。

近代に入ってからは、豊富な水資源を使つての工場誘致に早くから取り組み、今日では、村の産業人口の約45%を第2次産業が占めている。これは長野県の平均約30%と比べても突出しており、大桑村の大きな特徴となっている。



しかし、人口はここ数年、毎年100人近くが減り続けている。高齢化率は40%を超え、多くの地方自治体と同じように、少子高齢化・人口減と行政サービスの存続が喫緊の課題となっている。

こうした地域で、図書館が設置されたのには二つの理由がある。

一つは、役場庁舎が老朽化しており、耐震の面からも建て替える必要が迫る時期に来ていたことである。新庁舎建設の基本コンセプトには、「住民の健康・文化・交流・活動の拠点となる」ことが盛り込まれていた。そのため、新庁舎は図書館も含めた複合施設として建設されることになった。

もう一つの理由は、地域有志からの根強い図書館設置運動である。地域の家庭文庫関係者をはじめ、保護者、教員、読書愛好家か

らは村当局や議会に対して、図書館設置の働きかけが続けられており、そうした働きかけが、複合施設の中に図書館を盛り込む計画につながったといえるだろう。

### ◆基本的な考え方

図書館の基本は、住民が、個人および社会の発展のための、意思決定の材料となる情報へのアクセスを保証することである。

そのため、村の図書館条例では、図書館設置の根拠を「大桑村のすべての村民の知る自由を守り、自治と文化の発展に寄与し、互いに暮らしやすい地域を実現するため」と記述した。

大桑村の特徴は、産業人口の4割以上が第2次産業に従事しているというものである。農業や商業、観光業などは少ない。安定した職場があることで、個人が課題解決的に情報を収集する機会が少なかったと推察できる。

図書館に対しても「文学書が並んでいるところ」という認識が強く、課題解決のために使う場所と認識している人は少なく感じられる。

とはいえ、急速に進む少子高齢化によって、地域の互助、祭りなどができなくなるなど、身近で切実な問題が顕在化しかけている。また、世界的なゼロカーボンの潮流が職場にも何らかの変化を及ぼすのではないかと危惧もある。地域存続のために、何らかの手を打たなければいけないという危機感も表れ始めている。

そこで、まずは新しい情報、価値観に触れ、そこから地域を見直し、その課題に取り組めるようにしたい。そんな考えから、図書館の基本コンセプトを「図書館:新たな出会いの広場 ~学び・交流・発信~」とした。「出会いの広場」と表現したのは、誰もが自由に入出し滞在できるところ、本だけでなく、そこにいる人とも出会ってほしいという願いからである。

なお、選書に関しては、今まで出会うことのなかった考え方に会えるよう、意図的にジェンダーや多様性など、最新の思潮にかかわる資料を集めてきた。文学では海外文学に重点を置き、また、地域自治に関する資料も重点的にそろえるようにしている。



### ◆人と人をつなぐ

図書館が提供すべき情報は「本」ばかりとは限らない。また、文字として、文章として表現されたものだけが情報とも限らない。音声や映像も情報であり、「人」そのものもまた情報である。そのため、人と人をつなぐイベント的な活動も図書館の重要な役割と考えた。

図書館でのイベントは、そこに参加した人と人の出会いをこそ大切にしたいと考えて運営してきた。以下、当館が取り組んでいる代表的なイベントを紹介したい。

### (1) もぐもぐリサーチ(調理実習と、それに関連したレファレンス事例の紹介)

新しい料理や調理法という情報を得るとともに、今まで存在を知らなかった地域の人材と出会うことができる。そこに、図書館側から、調理に関するレファレンス事例を紹介することで、図書館の使い方も知ってもらうことができる。県立図書館と Zoom でつないで実際にレファレンスをしてもらうことで、図書館間の相互協力についても知ってもらえるようにしている。さらに、集まった受講者同士が情報交換をして、新たなつながりができるように工夫している。

このイベントをきっかけに、受講者が中心になって食育の学習会を立ち上げたいという動きもあった。

### (2) 推しレコ!(アナログレコードを持ち寄っての鑑賞会)

小さなお子さんをお持ちのお母さんから、子どもが騒ぐことが心配で、図書館に来られないという声があり、図書館イコール静寂というイメージを変えたいという思いから始めた企画。

当初は高齢者が懐かしさを求めて集まることを想定していたが、幅広い階層の参加者があり、なかにはあえて掘り出し物のレコードを持って参加する若者もいた。特徴的なのは、男性の参加者が多いことで、ふだん地域社会との交流が少ないといわれている高齢男性が集まる場として注目されている。

やはり、このイベントで知り合った方が、新たな音楽イベントを立ち上げるという動きにつながった。

### (3) 図書館 de シネマ(図書館所蔵映像資料のスクリーン鑑賞)

情報は「本」だけではないという考えから、図書館で所蔵する映像資料を、映画本来の鑑賞形式である、大きなスクリーンで見るといったイベント。

上映後は、お茶を飲みながら座談会をしており、映画の感想だけでなく、地域の困りごとから社会問題まで話題が広がる。

参加者から、自主上映の相談を受けることもある。今年度は、地元のアーティスト集団が、独自の映像イベントを開こうと計画中である。

### (4) むら歩きのスヌメ(地域のおすすめスポットを調べ、発信する)

地域を知ること、発信することを組み合わせたイベント。実際に村内を歩き、気になるポイントを写真に撮り、文献で調べ、インターネット上で発信する。

第1回は予習として、昭和20年代の航空写真と現在の航空写真を見比べて、地域の変化を語り合う会を催した。

これも幅広い階層の方が集まり、かつての村の様子や、新たな発見を語り合い盛り上がった。

これらのイベントの実施を通して、図書館が語り合う場として大きな意味を持つことを実感しており、図書館を介しての交流も生まれつつある。

### ◆デジとしよ信州

大桑村の人口が約3200人とはいえ、2万冊程度の資料で利用要求に応えきれものではない。もちろん、相互貸借などによって、要求される資料はできる限り提供するが、利用にストレスのあることは否めない。そこで、開館準備段階から、デジタル資料を案内することを視野に入れていた。

そんな折、長野県では市町村と県が協働して電子図書館を運営しようという計画が立ち上がった。プラットフォームを県が負担し、コンテンツ代を市町村で出し合うという形は、小規模自治体にとっては願ってもない話だった。

コンテンツ代は、1割を均等割、残りの9割を自治体の人口割。小規模自治体は少ない負担で一人ひとりの住民に大きなサービスが提供できるのである。

この計画はコロナ禍による図書館の休館、自然災害、地理的状況などさまざまな障害を乗り越えて、すべての県民に図書館サービスを提供したいという長野県図書館界の熱い願いから立ち上がったものである。山間の小規模自治体にとっては大きな意味のあるものにとらえ、当館でも利用者支援・広報を担当し全県への広報にかかわり、積極的に電子図書館の普及に協力してきた。

リアルな図書館の利用登録の際には電子図書館の利用登録もお勧めし、一度にリアルと電子の二つの図書館の利用登録ができるようにしてきた。おかげで、村内の電子図書館利用登録率は10%を超え、長野県内の自治体の中でも高い登録率となっている。

残念ながら、電子図書館はリアルな図書館のように、肌感覚で利用者の動向を感じることはできない。統計から読み取れることで動向を知るしかないが、それを見ても、とりたてて特徴的なところは感じられない。利用率となると、電子図書館で利用されているコンテンツ数は、リアルな図書館の貸し出し数の30分の1の程度である。

高齢化率の高い地域にあっては、利用登録はしたものの電子端末でのアクセスに躊躇してしまい、実際の利用につながらないのかもしれない。その他にも、ディスプレイ上での読書に慣れていない、希望するコンテンツがないなど、理由はいくつもあるだろう。

電子図書館がまだまだ発展途上のものだとすることを強く感じている。今後も利用者だけでなくベンダーや出版社にも働きかけ、より利用しやすくなるような電子図書館の普及に努めていきたい。

ただ、今年度、村内の小学6年生全員がリアルな図書館と同時に電子図書館の利用登録もしてくれた(中学生はすでに全員が登録済み)。国語科のカリキュラムの中に公共図書館の見学が入ったこともあり、担任の先生の強い働きかけで実現したものである。教室まで出かけて、電子図書館の利用方法のレクチャーもおこなった。そのせいもあるのか、統計上では10代の利用が少しずつ増えている。

電子図書館や青空文庫、国立国会図書館のデジタルアーカイブなどによって、小さな図書館では蔵書として持たずとも、そして相互貸借によらなくても利用者に提供できる(正確には利用者自身がアクセスする形ではあるが)資料が増えることになる。その分の資料費と多くない配架スペースを最新の資料に振り分けることができる。

ただし、デジタル端末による資料検索や読書は意図的に導く必要がある。多様な利用者を対象としている公共図書館では、効率的な利用案内の機会は取りにくい。その際、GIGA スクール構想で生徒一人ひとりに電子端末が配布されている学校との連携は大きな意味があるだろう。

### ◆課題

以上、ねらいをもち、手を打っているつもりではあるが、課題は山積みである。一番の課題は、なかなか伸びない利用率である。登録率は全住民の23%。昨年度の貸出密度は3.2冊である。正直なところ数字を出すのが恥ずかしい。

利用が伸びない要因はいくつかあるだろうが、立地の悪さは大きい。図書館を含む役場庁舎は、防災拠点となることも想定して作られている。そのため災害警戒区域を避けて立地選定をした結果、住民の生活動線から全く離れた場所を選定せざるを得なかった。自動車が運転できない、特に高齢者、小・中・高校生はアクセスが困難であり、このことは、利用状況に大きな影響を与えていると思われる。

また、これまで図書館がなかった地域だけに、気軽に立ち入ることを遠慮する住民、予約やリクエストを遠慮する利用者も多い。さらなるPRとともに、図書館に来ない(来られない)住民との対話の機会を作り、住民の潜在的な学習ニーズをとらえることが現時点での大きなテーマである。

## AI 活用で図書館は何を目指すか

戸田 あきら

OpenAI 社の ChatGPT が 2022 年の 11 月に発表されてすでに 2 年近くになるが、この約 2 年間における AI 技術の社会への浸透には目を見張るものがある。Google, Microsoft ほかの巨大 IT 会社も次々と AI 技術を開発・取り入れ、われわれは日常生活の中で生成 AI を利用できるようになった。当然、図書館の世界も例外ではなく、AI はわれわれの仕事の中に入り込んできている。

アメリカ図書館協会の機関誌 “*American Libraries*” の 2024 年 3-4 月号の特集は、「AI の世界: その利用、倫理、含意に関する図書館員の反応」<sup>1</sup> である。全米五つの図書館における利用事例が紹介されており、うち、公共図書館は 2 館（うち 1 館は市と大学とのジョイントライブラリー）である。

### ◆発達障害をもつ子どもへの AI ロボットの貸出

紹介されている事例の一つは、サンタアナ公共図書館（カリフォルニア州）における AI ロボットの貸出である。子どもに社会感情的なスキル (social-emotional skills) を身につけさせるように設計された AI 搭載の人型ロボットを、発達障害をもつ子どもたちに貸し出すというものである。ロボットは表情豊かな顔と腕を持ち、会話ができ、また、感情も理解できるそうだ。社会関係の構築に苦労している子どもたちに 1 回につき 3 か月貸し出されるとのことである。貸出用ロボット以外にも、会話ができたり何らかのレッスンを提供できたりするロボットが設置されている。



▲ 提供されているロボット（サンタアナ市のウェブサイトより）

（出典：<https://www.santa-ana.org/event/meet-moxie-robotic-companion-lending-program/>）

館長は、それぞれの親から、これらのロボットを利用して子どもが人間関係づくりや冷静さを保ったりするという点で著しく成長した、子どもに英語を学ばせるのにロボットを利用しており効果があったと報告されていると述べている。

### ◆閉館時間中に対応するチャットボット

もう一つの事例は、サンノゼ市（カリフォルニア州）の公共図書館であるマーティンルーサーキングジュニア博士図書館の取り組みである。この図書館は、市の公共図書館であると同時にサンノゼ州立大学図書館でもあるという珍しい形となっている。

この図書館では、2020 年秋以降、AI 搭載のチャットボットを閉館時間以降の利用者対応として活用している。このチャットボット（図書館名にちなんで「キングボット」と呼ばれている）は、入門的なレファレンスにも対応し、質問に答えて文献やデータベース、「調査の手引き」へのリンクも提供している。新しい質問がなされるたびにそれが蓄積され改善されており、最新調査では、88%の利用者がキングボットは適切な情報を提供している（同意あるいは強く同意）と評

価しているとのことである。担当者は、キングボットは「単にサービスに従事している、というだけでなくサービスを促進している。利用者が対応に満足しなかったときは、キングボットは専門の主題図書館員とその連絡先を伝えている。」と述べている。

### ◆図書館での AI 活用の今後

この二つの事例は、いずれも図書館サービスの個別分野に AI 搭載のサービスコンポーネントが導入されたケース、と言うことができるだろう。

図書館業務における AI の最初の使い方としては、個々の図書館員が文書作成や企画立案などの際にヒントを得るといったものがあつたろう。しかし、このような汎用的な使い方は人によって利用内容、利用度が不安定であり、図書館全体として見た場合、必ずしも効率的でも効果的でもない。次のステップが、ここで紹介された事例のように、個別分野に、他の業務システムにあまり影響を与えない AI 組み込みのサービス製品を業務に導入するという使い方である。それによってその部分の効率化、サービス改善が実現できる。*American Libraries* の今回の特集からアメリカの公共図書館も、現状ではこの段階だと推察できる。

しかし、いずれ、そのほかのさまざまな業務、図書館のコアとなる業務（資料・情報の収集、整理、資料・情報の探索・提供）への AI の組み込みも今後進んでくるだろう。例えば、図書館の中で最も専門性が高い業務の一つと言われる選書業務についても、対象の本の内容と当該図書館の資料利用状況、また、地域の人口構成などから、予算枠内での選書おすす度度を提示する機能などは十分考えられる。同様に専門性の高い情報探索支援についても、利用者の問題意識を分析し（チャットのなやりとりを含む）キーワードを抽出し、それにより適当と思われるデータベースを検索し、結果を適合度順に表示する、などは、すでにその端緒となりうる実験的な取り組み<sup>2</sup>が始まっている。つまり、近い将来、図書館職員が担ってきた中心的な専門業務、利用されそうな資料を収集・整理し、利用者の求めに応じて資料や情報を探索・提供するという業務は、その多くが AI によって担われるようになるだろう。そうなったときに AI は図書館に何をもたらすのか。人が AI に置き換わることによる効率化なのか。

Andrew M. Cox と Suvodeep Mazumdar は、図書館業務への AI の適用に関する論文<sup>3</sup>の結論部分の中で、AI が図書館に与える影響として次の可能性、方向性を示している。

- 強化された知識探索機能やチャットボットを通じた利用者へのサービス改善
- 新しい次元の情報リテラシーの必要性
- 利用者データの分析によるより深い利用者理解

健全な知識社会を支える地域の知識・情報インフラストラクチャとして、これらの方向に図書館サービスをどう拡張していくか、来たるべき本格的な AI 導入に向けた新しい時代の図書館サービスの構築が求められている。

### 【注・参考文献】

1. “The World of AI: Librarians reflect on uses, ethics, and implications”, *American Libraries*, vol.55, no.3/4, 2024, p.20-33.
2. 例えば、吉本龍司「生成 AI を活用した『蔵書検索サポーター』の実験」『図書館雑誌』 vol.118, no.5, p.263-267 など。
3. Cox, Andrew M. and Mazumdar, Suvodeep. “Defining artificial intelligence for librarians”, *Journal of Librarianship and Information Science*, vol.56, no.2, 2024, p.330-340 (First published December 22, 2022).  
この論文の中で Cox と Mazumdar, Suvodeep. “Defining artificial intelligence for librarians” は、図書館業務の効率化を含め五つの方向性を挙げているが、ここではこのレポートの文脈に沿った三つに絞って紹介した。

